



Title	M. Arnoldの女性観 : "Switzerland"を中心とする一考察
Author(s)	上山, 政義
Citation	大阪外大英米研究. 1971, 7, p. 93-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98988
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

M. Arnold の女性観

—“Switzerland” を中心とする— 考察

上 山 政 義

Matthew Arnold (1822-88) の女性観について論述を展開する前に、彼の女性観と必ずしもとくに直接的に深い関係があるわけではないが、彼の思想などについて、断片的ではあるが少し触れておくことに致したい。

Arnold は文芸批評家として、さらには文明批評家として、唯だ単に文学のみに止まらず、広く政治、社会、文化などに亘って秀れた論評、批判を加えることによって、夙に令名を博していたのである。彼の批評家としての顕著な活動は「作品に従属していた批評の地位を高め、批評が創作の基盤たる時代の知的、精神的雰囲気や思想を創り出す機能を持つことを提唱したこと¹⁾」に見られるのである。正しくこの点においての彼の真骨頂が顕示されているのであって、批評家として刮目に値する epoch-making な提唱に識者が注目を浴びせたのも理の当然と言うべきである。批評家の責務が斯くの如き積極的な創造性を持つことに、誰しも異論をさし挟む余地はないであろう。

彼はその代表作の一つである *Essays in Criticism* の中で、批評の機能に関して述べた一節は余りにも周知の事柄である。

Its business is, as I have said, simply to know the best that is known and thought in the world, and by its turn making this known, to create a current of true and fresh ideas.²⁾

この批評の機能に就いての定義は、その発表された当時においてこそ重要な

(1) 英米文学辞典(斎藤勇編・研究社)

(2) *Essays in Criticism* (Oxford University Press) p.21 ll.17-20

意義を持ち、世人の注目を惹く見解であったであろうが、現代的視野に立って判断を下すならば、必ずしも金科玉条とするに足るものとは言えないことは火を見るよりも明らかである。風呂本武敏氏はこの点に言及して「『知られ考えられた最上のもの』とか『真の新しい理念』の実体についてはいささかあいまいのままである。そうしたものの存在を無条件に前提としている印象すらあり、その前提そのものをあらためて疑問に投げ込む姿勢は稀薄である。というより、彼においては、そうした前提は、当時の人々の心に共通な社会因子として、仮定よりは当然の事実の如くに存在していたと見る方がより正確かも知れない³⁾」と述べておられる。同氏がいみじみくも指摘しておられる如くに、Arnold の見解には俗に言う突っ込みの不足がないとは言えないであろう。また、ある意味では少々 dogma に陥っている憾みがないとも言えないのである。風呂本氏は Arnold の定義に関して更に言葉を継いで、「先に見たアーノルドの発言がいささかおめでたい印象をぬぐい切れないのは、一つには自らの立場を歴史的社会的な関係において定立しようとする意志が稀薄なせいではないか。つまりヴィクトリア朝人達の精神が共有していたものが、その外観的な強固さを主張するがゆえに、なかば自明の理と思えるものも、実は他の時代のそれ同様きびしく歴史の制約を受けている所産であるとの認識が不足していたのではない⁴⁾。」と述べておられる。歴史的基盤もしくは歴史の変遷の制約、および社会的環境の影響を無視あるいは軽視しては、現実の適確な把握が望めないことから考えて、この点で Arnold に認識が幾分欠けていたと見る事が可能なようである。

次に Arnold は思想 面では、Hebraism を排撃して Hellenism を唱道したことで世に知られている。彼が英国の思想界に印した燦然と輝く足跡は、英米文学辞典に次の如く叙述されている。「Matthew Arnold が *Culture and Anarchy* において、Hebraism に対立する概念として用いている Hellenism は古代ギ

(3) 英語文学世界 No.3 p.28 (英潮社)

(4) 同上 p.29

リシア人の精神，すなわち人間性の自由な伸展，いわゆる spontaneity of consciousness を肯定し，物があるがままに見 (see things as they are)，それによって人生の中にいわゆる sweetness and light を発見する知的精神のいわれである。彼の主張する教養の精神と殆んど同義であり，Arnold は Hebraism を排して Hellenism 精神を主張したのである⁵⁾』と。斯くの如くに英文学史の底流を形成する二大思潮の対照を close-up して，Hebraism を排して Hellenism を唱道した Arnold が，英文学史上における代表的 humanists の一人として見做されているのは誠に当然のことと言わねばなるまい。そして，彼の唱えた人間性の自由な伸展という概念が，世の識者を刺戟し覚醒させて，Victoria 朝文化という絢爛たる花を咲かせ，豊かな実りを結ばせる一助になったことは否めない事実であると言えよう。この時代の思想界の先達として彼の功績が決して軽視することのできない所以の一つは正しくここに存するのである。

ところで，Arnold は sweetness and light 「甘美と光明」を重んじて，provincialism, philistinism, materialism, cruelty などを極力排撃することに鋭意努力を惜しまなかったのであるが，sweetness and light の追求の効用について，彼は *Culture and Anarchy* の中で次のように触れている。

“The pursuit of perfection is the pursuit of sweetness and light. He who works for sweetness and light, works to make reason and the will of God prevail. He who works for machiney, he who works for hatred, works only for conclusion. Culture looks beyond machiney, culture hates hatred; culture has one great passion, the passion for sweetness and light.”

Arnold の考え方によれば，完全の追求は甘美と光明の追求に他ならぬのであって，甘美と光明を求めて努力する者は，理性と神の意志を流布せしめるために努力する者に他ならぬのである。豊かな情操の涵養と高度な知性の錬磨をひたむきに願う教養の精神は，そのまま秀れた人格の陶冶に通じるものである。

(5) 英米文学辞典 (斎藤勇編・研究社)

(6) *Culture and Anarchy* (Effingham Maynard & Co.) p. 36 ll. 18-25

彼のこの所説は、時代の新旧、洋の東西を問わず心ある者をして耳を傾けしめるものであろう。

今更改めて言及するまでもなく、英国における第十九世初頭の数十年間は、Romantic Revival の時代と呼ばれ、Classicism の反動として Romanticism が澎湃として沸き起り一世を風靡したのであるが、Victoria 朝時代に入っても、Romanticism は依然として英国の文学思潮の主流の一つとして残り、やがて抬頭してきた Naturalism や Realism などと共に、英文学史上に大きな役割を果たしてきたのである。この第十九世紀の英国の浪漫主義に関連して、山川鴻三氏は次のように述べておられる。「十九世紀の浪漫主義には二つの対立する傾向があった。一つは宇宙の絶対の理法を求める傾向であり、他は感覚にふれる具体的なものを重んずる傾向であった。われわれはこれを自然主義と感覚主義あるいは理想主義と審美主義と呼び得るであろう⁷⁾。」と。このような前置きをした後で、同氏は Arnold の理想主義者としての一面を Pater のそれと対照させつつ論述を展開しておられる。Arnold の思想傾向を具さに眺めるとき、彼の思想に理想主義の色彩が濃厚であることは容易に推察されるところであらう。

さて、以上は批評家、思想家としての Arnold の profile の一端を紹介したのであるが、本稿では斯くの如き思想的背景をもつ Arnold が、如何なる女性観を抱いていたかを彼の詩を通じて考察することに致したい。ただし、ここで検討の対象としているのは、彼の女性観の中でも彼の恋愛観に限定されていることを予め断っておかなければならない。

Arnold は “Poetry is a criticism of life.” と喝破して、詩が単なる修辭的技巧の駆使に終るべきではなく、嚴肅な人生の諸相の批評であるべきことを説いた張本人なのであることに思いを致せば、彼のいわゆる *Marguerite poems* の中に彼の女性観、とくに恋愛観が織り込まれていると考えても差支えないであらう。

(7) *The Albion* No. 8 p. 116

ところで、Paul F. Baum 教授は その著 *Ten Studies in the Poetry of Matthew Arnold* において *Marguerite poems* に謳われている Marguerite なる女性が実在の人物であるか否かに関して次の如く述べている。

The 'PROBLEM' of Matthew Arnold's Marguerite is by way of becoming as much of a critical nuisance as that of Chaucer's Criseyde. In both there is no final judgment to be had, and it requires therefore a certain boldness to renew the quest (as in the present instance) without fresh and positive evidence. Something may be gained, however, from reviewing the 'case,' attempting to distinguish the known facts and the plausible deductions, and thus possibly clarifying the issue.⁸⁾

上の引用文で明らかな如く、Margueriteの存否に関する決め手となし得る材料は現段階では見当たらないのである。従って以下の筆者の論述も Marguerite に関しては単なる憶測の域を出ないのであるから、彼女の存否の問題にあまり深く触れずに論述を進めることに致したい。しかし、Baum教授が、“She has a poetical significance and a biographical significance both inescapable and both ramifying in various directions.” と述べていることから明らかな如く、Marguerite についての探究は Arnold の研究の一部門として、看過すべからざる意義を持つことは言を俟たない。それ故に少しく Marguerite の存否について言及したい。

先ず、Arnold の研究者の大多数が Marguerite を実在の女性と見做していることは、Baum 教授の著書に次の如く述べられていることから明らかであり、筆者もその意見に感と同じゅうするものである。

Most of the others have accepted her as real on the evidence of the poems, though usually with some safe-guarding phrase.¹⁰⁾

(8) *Ten Studies in the Poetry of Matthew Arnold* p. 58 ll. 1-8

(9) *ibid.* p. 59 ll. 7-9

(10) *ibid.* p. 61 ll. 10-12

しかしながら、ここで注目しなければならないのは、他ならぬ T.S.Eliot の見解である。Eliot と Arnold との深い関係については、深瀬基寛氏の次の文章からもはっきりとうかがい知ることができる。

「アーノルドの占めている歴史的定位というものは、ゲーテ以来の最大のヒューマニストであり、（中略）その使命がアーノルド一代を以て終っているのではなく、今世紀に入ってアメリカの最大の文芸思潮をなしたバビット、モアア、シャーマンなどの「新ヒューマニズム」の直接の源泉をなし、イギリス本国においては1948年のノーベル賞受賞者 T.S. Eliot においてその正継者を見出すという歴史的前後関係の中継的契機として立っている人物だからである。」¹¹⁾

但し、Eliot が Arnold の思想をそのまま受け継いだものではないことは、今更言を俟たぬところであり、両者の思想に可成り相違点があることは、Cahill 氏の次の文からも極めて明白な事柄である。

Arnold still remains as a potent influence among modern humanist critics such as Douglas Bush and Yvor Winters, but he has lost the central influence among those modern theorists who follow Eliot. For such humanists as Bush and Winters, the moral relevance of literature is salient in their criticism ; they emphasize this aspect in Arnold, and generally neglect his equally important aesthetic insights. Those critics who have followed Eliot have deplored the mixing of morality and literature ; they have embraced a literary standard which treats literature as an aesthetic entity, devoid of moral intent and persuasiveness.¹²⁾

ところで、斯くの如き現代における Arnold 研究の最高権威である Eliot は、Marguerite のことを “at best a shadowy figure, neither very passionately

(11) 「批評の建設のために」(深瀬基寛著、南雲堂) p. 4

(12) *A Comparative Study of the Criticism of Arnold and Eliot* (Daniel Cahill 著, University Microfilms)

desired nor very closely observed, a mere pretext for lamentation”⁽¹³⁾と考
えているのである。従って勿論この Eliot の意見を軽視すべきではないが、
Arnold の女性関係については Eliot がさほど重きを置いて考えなかったとも思
われ、筆者はこの点については Eliot の見解に同調することに躊躇せざるを得
ないのである。

さて、本稿には、*Switzerland* を中心とする一考察という副題がつけられて
いる。この副題が示す如くに、本稿は Arnold の一連の love poems から成る
Switzerland の内容を検討することによって、既述の如く彼の女性観、さらに
限定して言えば恋愛観とも言うべきものを考察することがその主目的なのであ
る。

さて、*Switzerland* は Arnold のいわゆる *Marguerite poems* の中に入るも
のであり、彼の詩集では当然のことながら Lyric poems の中に分類され、そ
の劈頭に置かれている。現在七つの詩篇から構成されているが、頭初から幾度
かの変遷を経過してきた。即ち、*Switzerland* という title は1853年版で最初
に用いられ、その中には次の六つの詩篇が含まれていた。

1. To my Friends, who ridiculed a Tender Leave-taking
2. The Lake 3. A Dream 4. Parting 5. To Marguerite
- ['Yes: in the sea of life enis!d'] 6. Absence

しかし、1854年には次の八つの詩篇に増加された。

1. To my Friends 2. The Lake 3. A Dream 4. Parting
5. A Farewell 6. To Marguerite ['We were apart: yet day by
- day'] 7. Isolation ['Yes: in the sea of life enis!d'] 8. Absence

なお、1853年版の To Marguerite は1854年版では Isolation に title を変え
たのである。

引続いて1869年には A Dream が除外され、その代りに最後に1867年に既
発表の The Terrace at Berne がこの group に組み入れられた、その際 To

(13) *Ten Studies in the Poetry of Matthew Arnold* p. 61 ll. 8-10

my Friends は A Memory-Picture となり、Isolation が To Marguerite という副題をつけて、元の To Marguerite の前に配置され、元の To Marguerite が To Marguerite—Continued となったのである。

さらに、1877年には A Memory-Picture は *Early poems* の方へ移動し、最終的には *Switzerland* は前述の如く次の七つの詩篇によって構成されることになった。なお、先は除外された A Dream は1881年には *Early poems* の中へ復活されている。

1. Meeting 2. Parting 3. Farewell 4. Isolation. To Marguerite
5. To Marguerite—Continued 6. Absence 7. The Terrace at Berne

先ず第一番目の Meeting は言うまでもなく Marguerite との出会いを取扱った詩である。この詩が書かれた時点において、二人は初めての逢瀬を楽しんだわけではない。このことは“My Marguerite smiles upon the strand, Unalter'd with the year.”という二行から徴しても明らかである。この詩の中で Marguerite の容姿についての描写が四行に亘ってなされており、Arnold がどのような外観の持主に心を惹かれていたかが如実に示されている。彼の表現に従えば、その姿は fair で graceful であり、languid hue を持ち、髪は、soft で enkerchief されており、目は sweet で blue であったという。しかしこの叙述は何の変哲もない平凡なものと言うべきであろう。何故ならば、男性が端麗な容姿や優しい目を持つ女性に好感を抱くのは至極当然のことであり、この描写からはとくに彼の嗜好の特色を見出すことは困難である。強いて言えば、頬の色が languid であったという点が意外の感を読者に与えること位のものであろう。彼女が素姓の怪しい女性であったことは、Baum 教授の次の二つの文からも明らかである。

“She had embraced other men before Arnold met her.” “He wondered if she had become a Paris prostitute.”¹⁴⁾

斯くの如く乱倫な生活を送ったことが彼女の頬に languid hue を与える一因

(14) *ibid.* p. 64 ll. 10-13

であったのであろう。しかしこの種の女性に心を惹かれた時点において、彼の恋は所謂命を賭けたような真剣なものではなかったであろうし、灼熱身を焦がす如き強烈な情炎を秘めたものでもなかったようである。何となれば彼はそのとき “Be counsell’d, and retire.” という神の tremendous voice をきき、やがては彼女に訣別を告げる決意を固めるに到ったからである。少くとも彼は恋愛至上主義の見地に立って行動する意志を欠いていたと言い得るのである。彼は哀愁感に満ち溢れた瞑想詩において極めて秀れてはいるが抒情詩、とくに恋愛詩において必ずしもとくに卓越した地位を占めてはいない所以はこの点にあるものと思われる。

第二番目の Parting については、それは a parting of lovers というよりはむしろ a parting of ways であって、この詩篇の中で Arnold は Marguerite と mountains との間の選択、そして愛と慰安ではないにしても心の平安である浪漫的孤独との間の選択を行っている。この詩の中頃における Marguerite に関する描写は次の通りである。

The sweet blue eyes—the soft, ash-colour’d hair—

The cheeks that still their gentle paleness wear—

The lovely lips, with their arch smile that tells

The unconquer’d joy in which her spirit dwells.¹⁶⁾

上の引用の終りの2行の中に Arnold の詩人としての情熱の一端を伺うことができよう。可愛い唇が作る arch smile は彼女の魂がその中に宿る unconquer’d joy を物語るという叙述には、そこはかたなく人の胸ををときめかせる内容が含蓄されている。女性の唇に浮ぶ優しい微笑が男性の心に及ぼす影響については、漱石の作品「門」の中の「お米の微笑」にも明らかな通りである。ところで、秀れた詩人に不可欠な要素の一つとして自然景観の巧緻な描写

(15) *ibid.* p. 66 ll. 3-7

(16) *The Poetical Works of Matthew Arnold* (Tinker & Lowry, Oxford University Press) p. 175 ll. 33-p. 176 l. 2

が挙げられるが、次に示す山岳の描写を巧みに織り込んだ叙述は Arnold の非凡な手腕の一端をよく具現しているものと言えよう。

The vast range of snow,
Through the loose clouds lifts dimly
Its white peaks in air—
How deep is their stillness!
Ah, would I were there!¹⁷⁾

巉峴として雲上に聳え立つ雪を戴く嶺々は文字通り静寂そのものであって、俗世界の喧騒に煩わされずに只管思索に耽ることを願う哲人 Arnold にとっては、正しく身を置くべき恰好の場所なのである。折しも人の心にそぞろものあわれを感じさせる秋の候、窓辺を疾風が吹きすさんでいる。彼が恋人 Marguerite と山岳のいずれを取るべきかに迷い悩んだ心底は察するに余りがある。しかしながら、恋する女に呼びかける次の二行は、Arnold の女性に対する情熱は冷い理性の前に脆くも屈したことを如実に示すものであろう。というのは、男性と女性の過去がどのように異なっていようと、心と心が強い愛の絆で結ばれておれば、そのような障壁を乗り越えることはあながち不可能とは言えないからである。

But a sea rolls between us—
Our different past.

第三の詩篇 “A Farewell” については、“Parting” と対比して Baum 教授は次の如く述べている。

As “Parting” describes the desire to escape, so “A Farewell” describes his return and final break with Marguerite.¹⁸⁾

Arnold が Marguerite と会った時、両人は万感胸に満ち、両眼に涙を湛えて、固く抱擁したまま口もきけないほどであった。しかしその時、不幸にも既

(17) *ibid.* p. 175 ll. 8-12

(18) *Ten Studies in the Poetry of Matthew Arnold* p. 68 ll. 7-9

に両者の心の中では恋人としての愛情が全く冷めていたのであった。激しい抱擁が終わって暫時が経過すると、Arnold は Marguerite が最早彼に愛情の片鱗すらも抱いていないことを感知する。

Days flew ; —ah, soon I could discern

A trouble in thine alter'd air !

Thy hand lay languidly in mine,

Thy cheek was grave, thy speech grew rare.¹⁹⁾

移ろい易く変り勝ちなのが人の心の常である。それ故に月日の経過につれて Marguerite の愛情が冷却したことを Arnold は少しも咎め立ててはいない。時なる試練に堪えぬくことができなかったような愛情は真の愛情ではあり得ない。Arnold は彼女の愛が一時的な気まぐれに過ぎなかったことを看破したのである。同時に彼は彼女の愛情を繋ぎ留めることができなかったことを自分の責任として歎いている。何となれば、彼女との結婚が彼の将来の公私の生活に及ぼすマイナス面を顧慮して、彼女の愛情の獲得にひたむきな情熱を注ぐことを躊躇したことが、この破局の原因の一つであったことを彼自身も心の底で感じていたからである。彼はこの現し世では実らせられなかった彼女との儚い恋の花を、来世でこそ実らせようと詩の中で謳っている。彼の夢に描く来生では、憎悪と恐怖に満ち溢れたこの野暮な世界において余りにも粗暴に投げ捨てられる gentleness が損われることがなく、狂乱怒涛の世界がわれわれのために決して満足させてくれることのない平和への渴望をいやしてくれる場所に他ならない。秀れた宗教詩を書いて宗教に関しても造詣の深い彼の面目の一端がここに伺い知られるのである。しかし、希望と夢を来生に託すことは冷厳な現実からの逃避というべきであり、あらゆる障害を克服し、文字通り花も嵐も踏み越えて、初一念を貫き通す覚悟を欠いた Arnold は、Marguerite に関する限り、不退転の決意を欠いたものも評されても致し方がないであろう。

第四の Isolation. To Margnerite. については、Baum 教授は次の如く述べ

(19) *The Poetical Works of Matthew Arnold* p. 178 ll. 5-8

ている。

The “Isolation” poems, in spite of their handicap of shifting and unfortunate titles, are Marguerite’s triumph, her immortality, the tokens of her durability.²⁰⁾

すなわち、この詩から Marguerite の勝利、不滅、永続性の象徴を読みとることができるわけである。このことは Marguerite が離別の後も尚お Arnold の脳裡から容易に消え去ることのない存在であったことを遺憾なく示している。熱愛する女性と別れ孤独の苦しみを味わうことを余儀なくされた男性の煩悶が詩篇の随所に漲っている。この詩の最終節には次の如く謳われている。

Of happier men—for they, at least,
Have dream’d two human hearts might blend
In one, and were through faith released
From isolation without end
Prolong’d ; nor knew, although not less
Alone than thou, their loneliness.²¹⁾

Arnold は、少くとも二つの相寄る魂が一つに融合することを夢想した経験のある人は自分よりも幸福な男だと述べている。Marguerite との訣別が彼の心にとってどのような大きい衝撃であったかを伺い知ることができる。また、果てしない孤独さから解放された人、即ち、念願かなって好伴侶を獲得した男性に対する切なる羨望が行間から滲み出ている感じを読者に与えはしないであろうか。

第五番目の To Marguerite の続篇に就いては、Baum 教授は、

“ ‘To Marguerite—Continued’ is Arnold’s lyric best, though marred by one or two infelicities.”²²⁾

(20) *Ten Studies in the Poetry of Matthew Arnold* p. 73 ll. 1-4

(21) *The Poetical Works of Matthew Arnold* p. 181 ll. 25-30

(22) *Ten Studies in the Poetry of Matthew Arnold* p. 73 l. 31

と論評し、極めて高く評価している。この詩篇は6行宛の4つの stanzas から構成されている短詩である。しかしながら、その内容は人間の孤独さを謳上げた格調の高い名詩として、識者の讃辞を受けるに値するものと言っても過言ではあるまい。次に第三節を示してみよう。

Oh! then a longing like despair
Is to their farthest caverns sent ;
For surely once, they feel, we were
Parts of a single continent !
Now round us spreads the watery plain—
Oh might our marges meet again !²³⁾

[they は islands の代名詞：筆者注]

「絶望にも似た憧憬の思いが、最も遠隔の洞窟にさえも送られる。何故ならば、確かにわれわれは嘗ては単一の大陸の一部分であったのだから。然し、今やわれわれの周囲には大海原が広がっている。」と述べ「われわれの周辺は再び相寄り会合すること」を祈っているのである。この比喻の巧緻さは正しく圧巻と評することも可能であり、燃ゆるが如き恋慕の情を断ち切られて、孤独の境に陥った人の寂寥感、絶望感が見事な手法を以て鮮明に浮彫りされている。それと同時に心変わりした女性に対する捨て去り難い未練の切ない思いが、行間に滲み出ているのである。Arnold は更に筆を進めて、第四節において次の如く謳ってこの詩篇を結んでいる。

Who order'd, that their longing's fire
Should be, as soon as kindled, cool'd ?
Who renders vain their deep desire ?
A God, God their severance ruled !
And bade betwixt their shores to be

(23) *The Poetical Works of Matthew Arnold* p. 182 ll. 13-18

... The unplumb'd, salt, estranging sea.²⁴⁾

「憧憬の炎はそれが燃やされるや否や、冷却されるべく定めた者は誰なのか。深い希望を空しからしめる者は一体誰であろうか。」と彼は自らに問いかける。そして「神、神こそが相寄り相添わんとする魂を引裂いたのだ。」と答えるのである。この God の繰り返えしは読者の心に強い迫力を以て訴えずにはおかない。「神が、神こそが測り知れぬ、隔離する海を岸と岸の間に配置した。」という表現の中には、彼の宿命論、運命観とも言うべきものを瞥見することができる。Providence の定めには何人といえども抵抗することは不可能であり、結ばれぬ運命にある像は人力を以てしては如何ともなし難いと彼は考えている。この点に彼の抒情詩の弱点があり、限界があるようである。なお、The unplumb'd, salt, estranging sea については、Horaceの頌詩の追憶によるものかも知れないし、また Coleridgeの Christabelの反響であるかも知れないこと²⁵⁾が、Tinker, Lowry 両教授によって指摘されており、必ずしも Arnold の着想に依るものではない。しかしながら、この引用句の配置の適切さは、この名詩の掉尾を飾るにふさわしいものと思われる。

第六番目の Absence へと論述を進めよう。この詩の見出しは、恋歌としては読者にいささか奇異の感を与えるかもしれない。この事柄に触れて Baum 教授は次の如く述べている。

...the oddly named "absence" which confesses his unwilling renunciation—and also, perhaps, serves as transition to another love which ended in marriage.²⁶⁾

即ちこの Absence なる標題は Marguerite との失恋と、Miss Wightman への恋着との間の期間、換言すれば Arnold が恋人を持たなかった時期を指すものと考えられるわけである。しかし、実際にはこの詩は彼が Wightman に

(24) *ibid.* p. 182 ll. 19-24

(25) *The Poetry of Matthew Arnold* p. 156 ll. 19-24

(26) *Ten Studies in the Poetry of Matthew Arnold* p. 76 l. 31-p. 77 l. 2

恋し始めた時点において謳われたものであろう。心ならずも Marguerite との恋を断念した後の索漠とした彼の胸に明るい希望の灯をともしたのが他ならぬ Miss Wightman であった。彼は後には彼の伴侶となった彼女との出会いに際して、懐旧の念に堪えず Marguerite の面影を偲ぶのである。というよりも、Marguerite を思い出させる容貌を彼女が具えていたことが、彼女に魅惑された原因であったのであろう。彼は Absence の第一節において次の如く謳っている。

In this fair stranger's eyes of grey
Thine eyes, my love? I see.
I shiver ; for the passing day
Had borne me far from thee.²⁷⁾

彼が恋人と同じ眼差しの美しい乙女を見て身震いするほどの感動を受けたことに詩人としての多感多情さを伺わせるのではあるが、その原因が眼の表情、動作のみにふれられているのは、読者に何か物足りなさを感じさせずにはおかない。成程眼は心の窓と言われるものではあるが、苟も心惹かれた女性についての描写が、その眼の描写だけであって、その詩全体の抒情を十分に生がじきれない懼れがあろう。しかしながら、この詩篇の最終節における次の叙述は、Marguerite に対する未練の思いの募る彼の衷情を巧みに具現してなお余りがあると言えよう。

I struggle towards the light—but oh,
While yet the night is chill,
Upon time's barren, stormy flow,
Stay with me, Marguerite still!²⁸⁾

Arnold は光明に向かって心の苦闘を続けているのではあるが、一方夜の大気が尚お肌寒く、時が波瀾万丈の中に過ぎ去っている時においても「なおかつ、Marguerite よ、われと共にあれ！」と絶叫する彼の以前の恋人に対する情念

(27) *The Poetical Works of Matthew Arnold* p. 183 ll. 1-4

(28) *ibid.* p. 183 ll. 16-20

の激しさには、流石に詩人としての豊醇な情緒が鮮かな手法を以て描き出されているのである。

さて、愈々 “Switzerland” group の最後の詩篇である “The Terrace at Berne” へと筆を進める運びとなった。この詩篇は同じグループの他の詩よりも10年もしくはそれ以上遅れて、1867年に発表されたものである。Arnold が Berne を妻と共に訪れたのは1859年6月29日のことであって、彼は懐旧の情に堪えず、遥か遠くから昔の恋人 Marguerite との逢瀬に思いを馳せつつ作詩にそんだのである。彼はその後実に8ケ年の月日を費して推敲を重ねてからこの詩を発表したわけで、この詩の第一節から第三節までは自然景観が巧みな筆致で描き出され、われわれの眼前に髣髴と浮び上る思いがする。第四節以下において Marguerite が過ぎし幾星霜のうちに心身ともにどのような変化を遂げたかをいろいろと臆測しているが、全体の基調としては彼女に対する温い思いやりがその底流をなしている。即ち彼女の美しかりし容色が衰え、漲っていた気力が消耗したことを憂えているのである。しかし、日移り、年変るにつれて彼の Marguerite に対する思慕の念は漸次薄らぎ、諦観が彼の心を支配するに到ったことが詩篇全体から読みとれるのである。そのことはとりわけ次に掲げる最後の2つの節において顕著に伺われるようである。

Like driftwood spars which meet and pass
Upon the boundless ocean-plain,
So on the sea of life, alas!
Man meets man—meets, and quits again.
I knew it when my life was young,
I feel it still, now youth is o'er.
The mists are on the mountain hung,
And Marguerite I still see no more.²⁹⁾

上に引用した Like で始まる節は、Arnold の手になる1879年の原稿では、

(29) *ibid.* p. 185 ll. 9-16

Like driftwood spars. の代りに Like ships に変更されているが、これは遂に永久に陽の目を見ることはなかった。しかしながら、人間と人間との出会い、離別の様相の譬えとしては、driftwood spars よりも ships の方が遥かに優れた metaphor であると言えよう。但し、この描写は Arnold の独創的な着想というわけではない。即ち、この節は「人生の讃歌」の作詩者として知られる Longfellow の Aftermath から無意識に引用されたもので、彼も後にその事実に気づいたのであろう。また「海上で別れ別れになる船」という metaphor は恐らく 1845 年に Clough によって書かれた詩に用いられていて Arnold は勿論それを知悉していたはずである³⁰⁾。

さて、この節の内容は諸行無常、色即是空、生者必滅、会者定離といった如きいわゆる仏教思想と軌を一にするもので、Arnold の思想に東洋の人世観、世界観と一脈相通ずるものがあることを示唆している。彼はこの考えを年若かりし頃に既に悟っていて、青春が過ぎ去った時になっても尚おその考えを変えていないと述べ、遠くに望む山々が霞んでいるのと同じように、Marguerite との恋は遠い過去のものとなり、最早二度とこの世で会うこともないであろうと結んでいる。彼女の容色と気力の衰えを案ずる彼の叙述には、ほのぼのとした愛情の籠る哀愁感が溢れ、山野の美しい自然景観と過ぎし昔の恋人への追憶を巧みに絡ませた詩的技巧は、彼の筆致の巧緻さをまざまざと示し、詩人としての真面目、真骨頂を遺憾なく具現して余すところがない。彼の深遠な哲理と透徹した洞察力とは、修辭的描写の秀れた手法と相俟って、弥が上にも彼の詩篇の価値を高めているのである。

ところで、詩人としての Arnold の長所と短所とに関連して、「王者の悲歌」と題する論文の中で村松真一氏は次の如く述べておられる。「彼はえてして、詩的情熱に欠ける嫌いがあると言われる。しかし、この「棄てられし人魚のうた」においては、彼の想像はのびのびと自由に、そして抒情性豊かに展開され、少しも破綻を見せてはいない。詩の妙味は、凡ゆる芸術作品がそうであるよ

(30) *The Poetry of Matthew Arnold* p. 158 ll. 23-26

うに、虚実皮膜の境に存する。アールドの詩ごころは往々にして「実」に即き易く、「虚」に遊べぬ傾きがあったであろうが、人魚と人の世のたをやめとの、この哀れな物語の虚構の中では彼の詩ごころは自由に羽搏いた。彼の詩人としての生涯で、これ程彼の情熱を盛るに適した器は少なかったのではあるまいか。³¹⁾ と。筆者もこの叙述に感と同じようするものであって、ここで指摘されている詩人としての Arnold の欠点は抒情詩において一般にとくに露呈されている感が深い。従って、とりわけ抒情性が重視されるべき恋歌においては、哲人である彼にとってその真髓を全面的に発揮することが困難であったと想像される。しかし、*Switzerland* 全般を通じて見れば Marguerite に対する恋人としての情熱は随所において、読者の胸に迫り来るものがあることは疑いを容れる余地がない。ただ、この詩を通じて考察する限りにおいて、Arnold の女性観、とくに恋人としての女性観は、概ね静的な容姿にのみ重点がおかれ、その動的な面さらには人柄、知性などの描写が軽視されている点で物足りなさがある。このことは通常一般の詩人の場合であればともかくとして、彼の作詩の基本的態度、詩についての理念から判断すれば、わけでもその感が深いのである。彼が名門の出であり、また社会的な地位の破綻を恐れたことから、素姓のいかがわしい女性と結ばれることに躊躇した心境は十分に諒察される。それにも拘わらず、彼が徒らに社会的諸条件を顧慮し、世の毀誉褒貶にとらわれて、恋人に対し真実一路の純愛を捧げるのを断念したことは、彼の抒情詩人として限界を示すものと言わねばならないであろう。

(31) *The Albion* No. 11 p. 33 ll. 20-27